

---

# ひとこと、ふたこと（一人でいること、二人でいること）

白草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひとこと、ふたこと（一人でいること、二人でいること）

### 【Nコード】

N0211R

### 【作者名】

白草

### 【あらすじ】

一人でいるってどういうことだろう。二人でいるってどういうことだろう。誰かというってどういうことだろう。特別なことなんてなんにもない、ありふれた日常。大学の前期日程が終了し、夏休みに入り、特に何かに打ち込むこともなく、なんとなく日々を過ごしていた。だけどそうじゃなかった。実家に帰るんだった。風景を見て、思い出に触れる。記憶を、追う。忘れてきたもの、落としてきたもの、置いてきたもの。それをわたしは語ろうと思う。一人でいること、二人でいること。思いを馳せよう。あなたはどう思います

か  
？

久しぶりだな、と誰かが言った。

カフェテリアのオーブンテラス席でブレンドコーヒーを飲みながら、わたしはキリマンジャロとかブラジルとかグアテマラとかいう土地のことを考えていた。プライドをズタズタにされた土地のことを。

だけど誰かが言うの。調子はどうだ、って。

尋ねる声が頭の中に流れ込んで来て、コーヒー豆のこと、土地のことを脇へと押しやる。そもそも豆に関しては、暇を持て余した店員が勝手に説明しただけ。今重要なのは、声。だからわたしは耳を澄ます。

カフェテリアの中、ではない。店内にお客がない。寒すぎるんだ。きつと冷房の設定を間違えている。長袖の制服の店員さんたちが時々腕をさすっているのに、店内の状態は改善されない。少なくとも三日、店員さんたちは腕をさすり続けている。

……ということは。声の主はカフェテリアの外、ガラスで区切られたこちら側にいる。一人で本を読んでいる人、何か話しているのか笑顔の三人組、ノートパソコンに向かうスーツ姿の人、手を握り合っているカップル。傘のような庇が取り付けられた五脚のテーブルにわたしを含めた八人の人がいて、声は聞こえてくるけど不明瞭で。ついさっきまでコーヒー豆とその産地について考えていたわたしの耳は、道路を走る車の音だけを正確に捉えていた。カフェテリアとその外、境界線を示すかのように作られた花壇の向こうで、何台もの車がどこかを目指して走っている。けれど歩道を歩く人はいない。

幻聴だった。そういうことなのかもしれない。わたしは少し温くなってしまったコーヒーに口を付けて、プライドをズタズタにされたコーヒー豆の憂鬱について考え始める。

例えば、ブラジル豆百パーセント使用のコーヒーについて。コーヒー豆にランクがあることをわたしは知っていた。ついさつき店員さんから教えられた。無理矢理。だから考える。ブラジル豆を百パーセント使っていたとしても、ブレンドコーヒーと呼ばれてしまう可能性について。正直よく分からない。

だから、「君はどう思う」ってわたしは聞いた。オープンテラスにいる七人の知らない人に、じゃなくて、わたしがいるテーブルの上に座った真白な猫に。

知らない、と猫は答えた。

「知ってたらおかしいよね」

それより調子はどうなんだ、と猫が言う。

「中の上かな」とわたしは言って、誰かが誰なのか気付いた。白猫の声だ、って気付いた。だから、「久しぶりだね」って。

十日ぶりだな、と猫は言う。

ちよつと歩かないか、と猫が言った。

俺は純血種なんだ、と猫が言った。

カフェテリアの敷地から出て、わたしたちは目的地も決めずに歩き始めた。曲がり角を見つける度に正解のない問題を解くような気分で、次は？ 左。次は？ 右、という感じに問いと答えを積み重ねて。何個目かの交差点で信号待ちをしていると、思い出したように猫が言った。俺は純血種なんだ、と。

わたしは猫の言いたいことがよく分からなかった。純血種ってなんだろう、と思った。ブラジル豆百パーセント使用のブレンドコーヒーと何か関係があったのかもしれない。でも聞かなかった。聞いて欲しそうな顔をしてわたしを見上げていたから。わたしは聞かない。本当はどういうことかすごく気になるのに、気にならないよ、って感じに取り繕って。街を歩いて、今はなかなか色の変わらない歩行者用の信号機に目を向けている。

目の前にあるのは二車線の道路で、道幅はそれほど広くなかった。

中央線が実線じゃないから、道幅が十二メートル以下の道路。十字路でも丁字路でもなくただ真直ぐ伸びているだけの道。向こう側に渡りたいね、とわたしたちは話していたのだけれど、横断歩道は現れなかった。やっと見つけた横断歩道で信号が変わるのを待っていると、やっぱりわたしに聞いて欲しいのか、俺は純血種なんだ、と猫が言った。

「血統書付きなんだ」とわたしは言う。いつまでも焦らしていたらかわいそうだし。それに、信号、なかなか変わらないし。時間を持て余していたから。仕方なく。

目の前を一台の軽トラックが通った。後続車はない。

血統書ってなんだ、と猫が言う。不思議そうな声で。

「血統書は純血種の証明書なんだよ」

じゃあ君も血統書付きなのか、と猫。

車のクラクションがどこかで鳴った。

「そうかもしれないね」

でも、と猫が言う。血統書って誰が誰のために作ったんだろう。

猫の血統書は人が人のために作ったものだ。ヒマラヤン、ペルシヤ、ロシアンブルー。他にも猫の種類はあるけれど、すべては人のために作られたもの。わたしには関係のないもの。じゃあ、人間の血統書はどうだろう。あつても不思議じゃないと思う。ただ、それが誰のためのもので、誰が作るのかは分からないけれど。もしかしたら、人ではないものの証明書もあるのかもしれない、なんて。

分からないのか、と猫が言った。残念そうな、落ち込んだような声で。

「人間ってさ、色々複雑で難しい生き物なんだよ」

わたしはいつどこで聞いたのかも分からない言葉を猫に伝えた。何の解決にもならない、わたしのものではない言葉を、会話の間を埋めるためにだけに告げた。人間は色々複雑で難しい、と、わたしに言ったのはお爺ちゃんだと思うのだけれど、正直よく覚えていない。ああ。そういえばお爺ちゃんと最後に会ったのはいつだったろ

う。わたしは覚えていない。お爺ちゃんがどういう顔をしていたのか。髭は生えていたのか。生えていたなら、サンタさんみたいな髭なのか、そうじゃないのか。背中曲がっていたのか、そうじゃないのか。ブランドものの服を着ていたのか、そうじゃないのか。お金持ちなのか、そうじゃないのか。わたしは何も覚えていない。思い出そうとしても、思い出せなかった。

それは、つまりどういうことだ、と猫が言う。

「それはつまり、よく分からないってことだよ」

血統書つてやつも、色々と複雑で難しいんだな、と猫が言った。信号はまだ変わらない。わたしたちを道のあちら側に渡らせてはくれない。いつまで待たせるつもりなんだろう。

目の前を、さっき通ったのと同じ軽トラックが通った。けれど方向は逆。通ったばかりの道を戻っていく。と思ったら、横断歩道を過ぎて少しのところで止まった。

「君は純血種なんだよね」とわたしは猫に視線を戻して。

そうだ、俺は純血種だ、と猫はトラックに目を向けずに。

「じゃあ、血統書は誰が持っているの」

俺自身が血統書だ、と猫は言った。

その意味を、わたしが問うことはなかった。軽トラックを降りた男の人が、わたしに手を振っている。口を開いて何かを言っていた。雛、と。わたしに向かって言う。

わたしのことなのだろうか。もしかしたら白猫のことなのかもしれない。

そういえば、わたしの名前はなんだったろう。今この瞬間まで、必要だとは思わなかったもの。記号。雛？それがわたしの。

「おお、雛。こんな所にいたのか。待ち合わせ場所にいないから心配したじゃないか」

しわがれて、どこか演技めいた低い声。わたしはこの声を知っているような気がする。

「待ち合わせ、って」なんだろう。

男の人がわたしの目の前まで歩いて来て、足を止めた。わたしよりも頭一つ分背が高い。暑がりなのだろうか、ビーチサンダルにハーフパンツ、ポロシャツ。それとも暑いのが好きなのか、肌は日に焼けていて、きつと体を動かすことが好きなんだろう、立派な筋肉が腕にも足にもついていていた。首にも。そして首にはゲルマニウムのネックレス。テレビでよく見るやつだ。サングラスをかけていて顔はよく分らないけれど、やっぱりわたしはこの人を知っているような気がする。

「夏休みは実家に帰るって約束したじゃないか。忘れちゃったのか？」

まるで子どもをあやすかのように。仕方がねえなあ、昔頃から雛は忘れっぽい性質だったからなあ、って。太い腕を胸の前で組みながら、ククとおかしさを押さえきれずに笑う、その様は。

「まあ、そこがまたかわいいんだけどな」

そう、わたしは知っている。こういうものを何て言うのか。

「親バカ」

「おう、そうだな」さもそれが褒め言葉であるかのように、男の人は笑顔を浮かべて。「とりあえず、車に乗れ。親父もお前の帰りを待っている」わたしを促す。わたしに太くてごつごつした右手を差し出す。「爺さん、お前と会えるのを楽しみにしてるんだぞ」

爺さん。お爺ちゃん。懐かしい響きだ。雛子、よく来たね。今日は美味しい林檎をお隣さんから貰ってね。せっかくだから二人で食べようじゃないか。婆さんや博仁には内緒だぞ。佐恵香さん、坂上さんから貰った林檎を持ってきてくれないかね。懐かしい声。きつと今日も、わたしの好きな何かを買って、楽しみに待っていてくれるのだろう。

ちゃんと荷物はまとめてあるか。お父さんがわたしに問う。大丈夫。声には出さず、首肯して答えたわたしを見て、大げさに頷き返す。

「なあ、雛。あれは俺以上の親バカだからな。甘すぎて溶かされな



いよつに氣をつけろよ」

歩き出したわたしの背後で、お父さんが言った。  
猫の姿はいつの間になくなっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0211r/>

---

ひとこと、ふたこと（一人でいること、二人でいること）

2011年2月19日01時25分発行